アイヒェンドルフにおけるイギリス風景式庭園とエグゾティシズム（下）

桑原　聡

五　「航海」Eine Meerfahrt

アイヒェンドルフの遺稿のなかに、「船旅」Seereise ないしは「女王の島」Insel der Königin と仮題をつけられ、後に「航海」Eine Meerfahrt と名を冠されて出版された作品がある。初出は、息子のヘルマン Hermann von Eichendorff が編集した全集の第二版、第三巻、一八六四年である。ヘルマンはこの作品の成立を一八三二年から四四年の間、すなわちアイヒェンドルフがベルリンの文部省で働いていた時期とし、成立年として一八三五年を挙げている。*一 アイヒェンドルフはこの作品に手を加えるつもりでいたが、果たせなかった。われわれが今読むことのできるのは初稿である。*二 このことを踏まえた上でなおかつ見過ごすことのできない、いや看過してはならないアイヒェンドルフのエグゾティシズムをこの作品に明らかにするのが本論攷第二部の目的である。

この作品は、一五四〇年のスペイン船による大西洋航海を扱っている。アイヒェンドルフが一八三五年という年に、何故大航海時代の冒険譚を自作の題材にしたかは定かではない。

コロンブスの一四九二年のカリブ諸島の「発見」以降植民地征服競争が急速に始まる。大航海時代にはスペインが西インド諸島、中南米を征服し、ポルトガルはブラジルでプランテーションを行い、インドのゴアを拠点に香料貿易を行い富を築いた。その後オランダ、イギリス、フランスがスペイン、ポルトガルの植民地帝国に挑み、アメリカ大陸への植民、東アジアにおけるプランテーション、貿易によって支配権を握ることになる。その過程でイギリスは北アメリカ、インド大陸において覇権を獲得することとなった。*三

西欧による経済的植民地化のみならず「世界」の科学的認識と西欧による異文化表象にとって重要なのはなんといってもキャプテン・クックの一七六八年から一七七九年に至る太平洋探査である。クックの航海はアイヒェンドルフの作品に描かれているようなたんなる冒険ではなかった。「それは空間を移動しながら、認識を積み重ねていく経験であった。クックの航海は、無謀な冒険ではなく、計画された知的な活動である。そのころヨーロッパ人は知的な活動をつうじて地球を「世界」として認識しようとしていたのである。」*四 クックの航海によって南太平洋は正確に地図化され、太平洋は地理学的「空白」であることをやめる。地球はヨーロッパ人の眼を通して視覚化されることになる。それは同時にヨーロッパ人が南太平洋の、ほとんど裸のままの自然に近い生活を送っていた未開人、「ネイティヴ」との遭遇を意味していた。これらの「ネイティヴ」を観察・記述したのは言うまでもなくヨーロッパ人たちであった。コロンブス以来繰り返されてきたヨーロッパ人による、ヨーロッパ文明を基準とするネイティヴの表象化が組織化されることになる。*五 この異文化表象は後に詳しく見るようにアイヒェンドルフのこの作品をも覆っている。*六

一八世紀半ばに始まったイギリス産業革命により植民地主義は新たな展開を見る。産業革命は商品貿易、奴

隷貿易、輸出市場に加え、生産力の急成長が必然とする販路拡大と原料供給のために、さらに植民地獲得競争を推進した。イギリスの後を追い、フランス、ベルギー、アメリカ、イタリア、ドイツが、そして後には日本が植民地獲得競争に参入することになる。一八〇〇年から七八年までの間に欧米列強による全陸地面積支配は、三五%から六七%に拡大し、一八九〇年代に行われた列強によるアフリカ分割により支配陸地面積は一九一四年には実に約八五%に達することになる。*七 このような過程の中でエグゾティシズムが成立していったのはサイードが明らかにしている通りである。

ドイツの植民地獲得競争参加は他の欧米諸国に遅れ、ドイツ帝国成立後、一八八〇年代になってからである。一八七九年にサモア諸島、一八八四年には南西アフリカがビスマルクによって保護領とされ、八五年には東アフリカが、その後カメルーン、トーゴー、南洋諸島が続いた。*八

従ってアイヒェンドルフが大航海時代を作品の素材にするにあたってドイツの植民地主義がなんらかの影響を与えたとは先ず考えられない。しかし、一七九八～九九年のナポレオンのエジプト遠征、そしてその学問的記述、一八〇九年から二八年にかけて全二三巻という膨大な数で出版された、「一国が他国を集団的に大規模に占有しようとする企て」とサイードが名づけるナポレオンの『エジプト誌』のことや*九、イギリスのインド支配のニュースはアイヒェンドルフの耳にも達していたことだろう。また『コロンブス航海記』（因みにドン・ディエゴはコロンブスの息子の名である）、さらにキャプテン・クックの航海記、『ブーガンヴィル航海記』、キャプテン・クックの第二回航海に同行したG・フォルスター『世界周航』（英文一七七七年、独文一七七八～八〇年）等十七・十八世紀に数多く出版された航海記、一七一九年に出版された『ロビンソン・クルーソー』の影響を受けてドイツで数々書かれたロビンソナーデ（『予感と現在』でアイヒェンドルフはカンペの『ロビンソン二世』に触れている*十）の影響もあるだろう。さらには啓蒙主義の時代にヨーロッパ文明を批判するために

未開の島・土地を舞台とした「善良なる未開人」Gute Wilde の小説が多く書かれたこと、その後文明批判がエグゾティシズムに変質していったこと、そしてそれが一八五一年のロンドン万国博覧会[*十一]に一つの際立った経過点をなすことになることを考え合わせれば、アイヒェンドルフが「航海」と取り組んでいた一八三五年前後にはエグゾティシズムが拡大しつつあったことも容易に推測できるように思う。[*十二]

「航海」[*十三]は、先に触れたように、一五四〇年とされるスペイン船の大西洋航海を描いている。この作品は、主人公アントニオの航海の中に彼の叔父ドン・ディエゴが一五一〇年に行った冒険譚が組み込まれるという枠構造を形成している。

一五四〇年、ヴァレンシアの船「フォルトゥーナ」は船長アルバレスに率いられて船出した。その目的は「新しい土地を力ずくで発見する」ことにあった。サラマンカ出の貧しい学生ドン・アントニオは「世界を見る」ために、そして三十年前に出航したまま杳として行方知れずとなっている叔父ドン・ディエゴの消息を得ようと同船していた。船は子午線[*十四]を越え大西洋に出、アメリカへと向かったが速い潮流に方向を逸らされ、行く方のわからぬ方角に流される。二日間さわやかな風を受け、滑るように海面を走っていたフォルトゥーナは突然凪に襲われ、そのまま一週間近く停滞を余儀なくされる。そこは海の底まで見通すことができるほど透明な海である。ある日の夕刻、微かに風が起こり、帆が風を受けて徐々に膨れあがり、船は軋み始める。とその時見張りが「陸地だ！」と叫ぶ。彼らは海図にも記載されていない、「名も知らぬ香草と花が放つ爽やかな香り」に包まれ、椰子の木の生い茂るエキゾチックな島に漂着したのだった。

船長アルヴァレスとアントニオは夜にもかかわらず島に向かう。ボートは潮に流され座礁し粉微塵になるが、二人は危うく難を逃れ上陸に成功する。最初に上った頂の上でアルヴァレスは「この島を、そのすべての入り江と山々とそれに属する一連の島々共々占有する、と厳かに」宣言する。「野蛮人ども」das wilde Gesindel を

刺激しないかと火を焚くことも鉄砲を撃つこともできず、二人はより広い視界を求めて高い山を目指す。その途中二人は野蛮な未開人の一団が火を手に円を描いて踊っているのを目にし、驚く。未開人たちは踊りながらある時は盾をぶつけ合い、ある時はたいまつをぶつけ「飛び散る火花が彼らを火の雨のように取り巻」く。その真ん中に一人の女の姿が見える。「その美しい体は全体を長い巻き毛に覆われ、腕、頭、胸はきらきら輝く装飾品と野生の wild 花で飾られて」いる。アルヴァレスはウェヌスだと言い張り、二人は驚いて浜に逃げ帰ったところで仲間と出会う。

その後、一人の兵士が原住民との遭遇を報告する。アルヴァレスは原住民の「王」のもとに翌朝、最も勇敢な部下を派遣することにする。アルヴァレスは、がらくたの贈り物を担がせ、緋のマントで着飾りロバに乗って一行を率いる。山の奥深くにある「王」の居城に着いたアルヴァレスはアントニオが作成した原稿をもとに演説を始めるが、「王」は突然金をばらまく。スペイン人たちは金を拾おうとやっきになり、仲間同士で喧嘩を始め、大混乱に陥る。そうする間に原住民たちは彼らを包囲する。アルヴァレスの機転で彼らはかろうじて包囲を脱する。ほうほうの体で彼らは夜、再び浜の上陸地点に帰り着く。仲間とはぐれたアントニオも帰還する。

アントニオが出会った女の話を聞いたサンチェスは一人彼女を捜しに行く。しかし彼女を発見したその時、物音を立て原住民を起してしまい戦いとなる。アルヴァレスたちのいる浜まで戻ってくるが、サンチェスは加勢むなしく倒れる。戦いは激しさを増し、スペイン人たちが死を覚悟したその時、「輝く死者の飾り」を身につけた「ウェヌス」が現れ、原住民たちは額ずき、その間に女はスペイン人たちを舟に逃がし、自らも同行する。

海に逃れたアントニオたちは、翌朝、もう一つの島に遭遇する。水や食料を補給し、船の修理をするために彼らはこの島に数日滞在することにする。この島で一行は「隠者」、すなわち三十年前に行方不明となったアントニオの叔父ドン・ディエゴと出会う。「隠者」はアルヴァレスとアントニオのたっての願いに自らの体験を話

す。

「ムーア人の最後の支配も毀たれた[*十五]（・・・）。当時私はまだ若かった。波間を見ていると、花咲きにおう島々を従え黄金の塔に囲まれた驚異の王国が昼も目に浮かび上がってくるのだった―かくしてその王国を征服せんと喜び勇んで一艘の船を艤装したのだった」とディエゴは語り出す。出帆後ディエゴたちはとある島を発見する。朝を待って彼らは島の探索を始める。断崖の谷間に村を見つけるがそこには人っ子一人いない。その晩は海岸に堡塁を作り大砲を船から運び出して据え付け、いざというときに備える。未明に彼らは「髪をなびかせた女」に率いられた「野蛮人」die Wilden に襲撃されるが、大砲によって彼らをからくも撃退する。

サンチェス同様、「ディアナ」に比せられた「女王」に魅入られたアロンゾは一行を離れ、「女王」を求めて山に入る。ドン・ディエゴは彼を捜し、船を岸に沿って航行させる。未明、とある山に囲まれた谷に一行は宿営する。敵意のない証拠に彼らは陣営をその土地で平和の印と見なされている樹の枝で飾る。そこに朝の太陽とともに数限りない「野蛮人」の一行が「女王」を先頭にやって来る。かくして最初の平和裡の邂逅が行われる。

ドン・ディエゴは「女王」とその部族を「キリスト教に改宗し島を女王とともに支配」しようと決心し、島を見渡す岬に「堅き砦」eine feste Burg を造らせる。だが砦の落成式の前日の夜に「女王」たちから不意打ちを喰らう。彼らは乾燥しきった野に火を放ち、ドン・ディエゴら一隊は野火の中を命からがら浜にたどり着く。しかし浜では「女王」が丁度酋長たちとドン・ディエゴの船から戻ってきたところだった。双方激しい戦いの末、ドン・ディエゴは「女王」を腕に抱き、残ったわずかな部下たちとボートで船に戻る。縛られた「女王」は追ってきた「野蛮人たち」に船から離れるよう命令する。その直後船は火に覆われ火薬庫が爆発する。ひとりドン・ディエゴのみ助かり、この島にたどり着く。

ドン・ディエゴの正体が判り、さらにアントニオたちを逃がした少女がかの「女王」の姪であることが判明する。そして一行が出会った狂ったスペイン人がアロンゾであったことも明らかとなる。

この恐ろしい話を聞き終えてアルヴァレス一行は再び故郷に帰ることに決する。「かくして皆は異口同音に、新世界をとりあえずは発見しなかったことにし古き良き世界に陽気に戻ることに決した。」

島に留まることを望んだドン・ディエゴを残しアントニオ一行はスペインを目指して船出する。「しかし徐々に消え去りゆく島の岩場にディエゴは立ち、もう一度陽気な連中に祝福を与えた。私たちもまた彼らに背後から良き旅をと声をかけよう。」

以上が粗筋である。この作品は大西洋を舞台にしてはいるものの、ペーター・シュニーダーの指摘しているように、そのテーマからすればアイヒェンドルフお馴染みの基本構造を示している。異教とキリスト教、エロスの誘惑とそれからの救済、異郷と故郷といったテーマをこの作品に見いだすことは容易である。新しいものがあるとすれば、それは、この作品においてアイヒェンドルフが初めてヨーロッパの地を離れヨーロッパ人と異文化の接触を描いた点にある。*十六 この接触がいかに描かれているかを少しく詳しく見ておきたい。

先ず最初に私たちの注意を引くのはスペイン人たちの描かれ方である。先ず強調しておかねばならないのは、アイヒェンドルフの作品一般から受ける印象とは異なって、彼らは決してキリスト教文明の伝道師として称揚されているのではないということである。彼らの征服欲と伝道の使命はグロテスクにも滑稽に描かれている。この作品の冒頭でアルヴァレス以下のスペイン人たちが「新しい土地を力ずくで発見する」mit Gewalt neue Länder entdecken ために出帆したと明言されているのである。

アルヴァレスは、最初の島を発見したとき禿鷲 Geier が現れ船員たちがそれを凶兆として恐れ上陸を躊躇うのを見てそれを銃で撃つ。致命傷を負いながら島に向かう禿鷲を見やり、アルヴァレスは言う、「主人が来たと

島に告げよ」と。そして上陸し島の最初の頂に登るや否や、アルヴァレスは剣を抜き大地に突き刺し、「この島を、そのすべての入り江と山々とそれに属する一連の島々共々占有する、と厳かに」宣言するのである。

この島の領有宣言は、みすぼらしいヴァレンシアの船「フォルトゥーナ」でやってきた、これまたみすぼらしい船長アルヴァレスが貧乏学生アントニオのみを供に執り行う。この儀式はそのあまりにも大げさな身振りと厳粛さの故に笑いを誘わずにはいないが、実は、コロンブス以来の伝統を持っている。

一四九二年八月三日パロス港を三艘の船で出帆したコロンブスは十月十二日夜の二時頃、現在のバハマ諸島のウォトリング島に到達した。翌日、夜が明けてからコロンブス一行は島に上陸し領有を宣言する。『コロンブス航海誌』には次の記述がある。

「提督は、二人の船長（カピタン）をはじめ、上陸した者達、および船隊の記録官（エスクリバー）である、ロドリゴ・デ・エスコベード、ならびにロドリゴ・サンチェス・デ・セゴビアを呼んで、彼が、いかにしてこの島をその主君である国王ならびに女王のために、並居る者の面前で占有せんとし、また事実、この地において作成された証書に委細記されるように、必要な宣言を行ってこれを占有したかを立証し、証言するようにとのべた。」[*十七]

この領有の宣言は一体誰に向かって発せられているのだろうか。それは同胞のスペイン人ではない。ウォトリング島の先住民に対してである。スペイン語を解さない島民に対してスペイン語で領有を宣言し、あまつさえそれを文書として残すために記録官に書き留めさせているのである。それはコロンブスが属する文化圏が法的根拠として文書による記録を求めているからである。ここには明らかに欺瞞がある。島民の解さないスペイン語を使用して反駁されないことを前提として領有を宣言するとは、法的形式主義のペテンである。

グリーンブラットはコロンブスがその「不合理」を隠蔽するために「驚異」のディスクルスを用いていると指摘している。グリーンブラットの言葉を引く。

「すでに見たように、その儀式(コロンブスが行った形式にのっとった領有宣言の法的儀式のこと＝著者注)の中心には一つの欠陥、一つの不合理が存在していた。つまりそこでは、実際には起こりえなかったと想像しうることであるが、拒絶の行為の可能性が悲喜劇的に引き合いに出されていた―『そしてわたしは反駁されませんでした』(y no me fué contradicho)。その法的な宣言は、徹底的な形式主義の精神で行うこともできるのであるが、その形式主義はその後に情緒的・知的空白、穴を残す。その穴は、コロンブスのディスコースの読者を、笑いもしくは涙へと引き寄せ、さらにスペインが行った主張の合法性を疑うことへと引きつけかねない。コロンブスは、読者を驚きの方へと引き寄せようとする。つまり、演じられた占有の儀式の中心にあるその空隙を、実際に埋めてくれる驚異の意識である。」[*十八]

グリーンブラットはコロンブスの航海誌に頻出する「驚異」という言葉と占有の法的儀式の関係に着目し、「驚異」がコロンブスにあっては領有宣言に内在する「不合理」を隠蔽する働きをしていることを明らかにしている。「驚異」、それはキリスト教の神の贈り物なのである。グリーンブラットはコロンブスを例にヨーロッパ人が新世界に対してその発見期においてどのような反応を示したかをその著書で扱っている。それは言い換えれば、ヨーロッパ人は他者、異質なるものとの最初の接触に際して何故それを理解しようとするのでなく支配、領有しようとしたのかを解明することである。それはまたトドロフ[*十九]を導いていた知的関心でもあった。そしてこのことがアイヒェンドルフの小品を読むことの意義でもある。

だが結論を急がないことにしよう。アイヒェンドルフの作品における領有宣言はコロンブスのそれと比べてどうか。アイヒェンドルフの場合むき出しの占有欲は「隠蔽」されることなく露骨に現れている。しかし、領有を宣言するのが力の象徴とはおよそ正反対の貧弱な船のみすぼらしい船長であることによって、ここの描写はその意図の露骨さにおいてグロテスクであり、その現実離れにおいて滑稽の印象を与える。

またスペイン人たちは島の王を公式に初めて訪問した際に、島の王が投げ与えた金に目が眩み、危うく身を滅ぼす危険を招きもする。スペイン人たちを茶化す点においてこの箇所の描写に優るものはないであろう。

「道化にも見まごう連中（スペイン人たちのこと＝筆者注）はできうる限り身を飾り行列に加わった。先頭には旗を掲げた兵士の一団。（・・・）その後には何人かの水兵たちが続き、王のための贈り物を担架に載せていた。それは、平鍋、壊れた料理釜、そして貧しい船内から集められる限りのありとあらゆる古いがらくたであった。その次にはアルヴァレス自身が続いた。彼は野蛮人どもに威風あたりを払うがごとき印象を与えるために船のロバに乗り、大きな総髪をかぶり、古い幅広の緋色のマントを身に纏った。そのマントはアルヴァレスとロバをすっかり覆い隠してしまったので、ひょろりとした痩身の男が竹馬に乗って緑の野を行くがごとくに見えた。ふとっちょの船の料理番は、しかし、小姓の身なりに飾り立てられ、海から吹く爽やかな風がきちきちの羽根飾りのついた平帽子を今にも吹き飛ばしてしまいそうでたいそう困惑していた。他方ロバはどこ吹く風と落ち着いて時々新鮮な草を口一杯に食んでいた。」*二十

彼らを迎える島の王は、「肩に堂々たる羽毛のマントを纏い、頭には金鶏のように色とりどりの青サギの羽根飾りを」被り、「黄金の腕輪」をした「若く、背の高い、細身の男」である。*二十一 この王もまたスペイン人同様、アイヒェンドルフの揶揄の眼差しを免れることはない。若き王はアルヴァレスの総髪に格別の関心を抱く。「彼（＝王・筆者注）はそれ（＝総髪・筆者注）を長い間凝視していた、白目ばかりが目につくほどに。」アルヴァレスがアントニオが草稿を作ってくれた挨拶の辞を「仰々しく」mit großem Anstande 読み上げると王はもはや自制できない。「彼（＝王・筆者注）は好奇心を抑えきれず槍でアルヴァレスの鬘を突いてみた、すると自ら驚いたことにそれを本当に挨拶の辞を読み上げていたアルヴァレスの頭から持ち上げることに成功し、大喜びで目を輝かせ後ろを向き、槍の先に鬘を高々と掲げそれを一同の者たちに示した。荒々しい歓声のどよめき

が周囲の空気を満たした（・・・）。」*二十二 その後王は命じて金の入った籠を持ってこさせ、両手で「金の板、金の粒そして金の固まりまるまる」をスペイン人たちに投げ与える。スペイン人たちは目が眩み、降り注ぐ金に我を忘れる。「すると思いがけない黄金の雨の中スペイン人たちの間に突然争いと奪い合いが起こるのが見えた、誰もが独り占めにしようとし、彼らが大騒ぎをし言い争いをすればするほど、王はさらに金を次々と投げ与えた、彼の口元は軽蔑の微笑でゆがみ、真っ白な歯がときどき輝くのが見えた、ちょうど虎のように。」*二十三 そうこうするうちに原住民たちはスペイン人たちを取り囲み、襲いかかろうとする。そのことに気づいたアルヴァレスはすんでのところで「野蛮人たちの恐ろしい囲み」を脱する。

アントニオの叔父ドン・ディエゴが島を発見した一五一〇年においても、またアントニオたちがこの島に流された一五四〇年においても、「異質なるもの」das Fremde との遭遇は失敗し、力と力の衝突に終わる。両者の間には欲望、不信、敵意しか存在しない。この作品を読み終わって誰しも自問せずにはいられない、この物語はいったいなんなのだろうか、と。アイヒェンドルフはこの物語で何を言わんとしたのだろうか。先に断ったようにこの「航海」という中編は決定稿ではない。しかしそれを割り引いたとしても、この物語はあたかも異文化理解は不可能だということをテーマにしているかのごとくである。そしてスペイン人が如何にグロテスクにそして滑稽に描かれていようとも、「野蛮人」との対比において彼らにアイヒェンドルフの好意的視線が注がれていることもまた否定しようのない事実である。

しかしアイヒェンドルフの意図は恐らく異文化理解の可能性を示唆しようとするものであったのであろう。それはスペイン人の側からではなく、「野蛮人」の側から試みられるものであった。というのもアイヒェンドルフはアントニオの物語に一人の島の娘を導入しているからである。彼女は最初はスペイン人には「ウェヌス夫人」Frau Venus として現れるものの、彼らが原住民との戦いで生命の危機に陥ったときに彼らを助け、ついに

は彼らとともにスペインへと船出する。彼女はアルマ Alma と名乗り、片言のスペイン語を話し、スペイン人と原住民の間をかろうじて仲介する唯一の人物である。彼女は、しかし、ドン・ディエゴの一隊を壊滅させ彼らの船を爆破するために自らを犠牲にした「女王」の姪であることが判明する。アイヒェンドルフはスペイン人たちを帰国させることによってこの物語を閉じる。アイヒェンドルフはハッピーエンドを演出する。「かくして皆は異口同音に、新世界をとりあえずは発見しなかったことにし古き良き世界に陽気に戻ることに決した。」

しかし少しく注意深く読むならば少女アルマの登場が出し抜けであり必然性がないことは明らかである。ましてや彼女が、スペイン人たちとの戦いにおいて戦死した「女王」の姪でありながら何故彼らの側についたのかに至ってはまったく不明である。彼女の、二つの文化を仲介する者としての役割はあまりにも心許ない。この作品には亀裂が走っている。スペイン人に対する、とりわけアントニオに対する彼女の好意は何に由来しているのか。そしてその好意は両者を結局の所憎悪と敵対へと追いやる対立を除去するのに何の役にも立たないのである。

スペイン人を文明と文化の宣教師としては描かないアイヒェンドルフに異文化理解を妨げさせているものは一体何なのか。われわれはこの物語をさらに注意深く読む必要がある。そうすることによって、異質なるものの知覚を前もって一定の方向に導いており、それが故に相互理解を妨げている語り手・アイヒェンドルフの眼差しがいかなるものであるかを鮮明にすることができるであろう。

先ず目につく点は、スペイン人たちが各々名前で呼ばれるのに対して、島の住民が一貫して「野蛮人」Wilde（形容詞としてもまた名詞形としても）と名づけられ個人としてではなく危険な集団として描かれていることである。唯一の例外が先に触れた「女王」の姪アルマである。第二の点は、「女王」に象徴的に形象化されている「異質なるもの」das Fremde が女性的なもの、しかも荒々しい女性的なものとして表象されていることである。

最初の探索行の際アントニオとアルヴァレスは厳に囲まれた谷で初めて島の住民を見ることになる。そこの記述は以下の通りである。「驚いたことに彼ら（＝アントニオとアルヴァレス・筆者注）はそこで黒い肌をした野蛮人の一団 einen wilden Haufen dunkler Männer が風除けをつけた松明を手に規則正しく無言で輪になって踊っているのを見た。彼らは時々あるときは盾をまたあるときは松明をぶつけ合ったため火花が飛び散り、火の雨のように彼らを取り巻いたのだった。」*二十四「野蛮」wild という言葉は大きな活字を使った全集版でも七〇頁そこそこの物語の中で実に二〇回以上も使われている。それは島の住民に、男たちにもまた「女王」にも一貫して与えられている属性である。彼らを描写する語彙は極めて限定されており、彼らについての一定の表象を喚起することを目的としている。彼らはたとえば次のように形容されている。「野蛮人たち」die Wilden（二一九頁、二四〇頁、二四八頁、二五五頁、二五八頁、二六一頁、二六六頁、二六八頁）、「野蛮人たちが一人一人」einzelne Wilde（二五八頁）、「武装した一団」bewaffnete Haufen（二二〇頁）、「黒人の野蛮な一団」ein wilder Haufen dunkler Männer（二〇九頁）、「武装した黒人たちの恐ろしい輪」ein furchtbare(r) Kreis bewaffneter dunkler Gestalten（二五五頁）、「褐色の肌をした連中」braune Gestalten（二二〇頁）、「数知れない黒人たち」zahllose, dunkle Gestalten（二六七頁）、「野蛮な連中」das wilde Gesindel（二〇八頁）、「裏切り者のならず者たち」das verräterische Gesindel（二六七頁）、「野蛮人の群れ」eine wilde Meute（二三三頁）、「野蛮人の一群」die wilden Horden（二三四頁）、「恐るべき一団全体」die ganze furchtbare Menge（二三五頁）等々。島の住民は、このように、名を持たない、野蛮な、混沌とした、脅威の集団として表象されているのである。ここで使われている「野蛮な」wild という形容詞は、「未開の」unzivilisiert、「作法を知らない」ungesittet、「予測できない」unberechenbar、「粗暴な」roh、「暴虐な」gewalttätig、「残酷な」grausam 等という意味で用いられており、その意味は「連中」Gesindel、「不穏な一群」Meute、「粗暴な一団」Horden といった否定的なニュアンスを持つ集合名詞によってその危険性

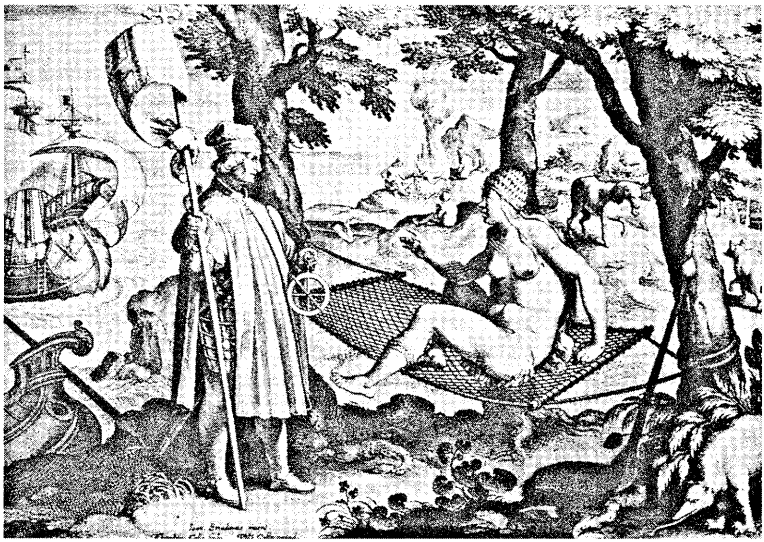
と不気味さを強められているのである。

「野蛮」wild はドン・ディエゴの話においては「女王」を特徴づけている語である。*二十五「女王」の文脈にあってはこの語には、島の住民に帰せられている意味を失うことなく、エロティシズムのニュアンスが付け加わる。ドン・ディエゴの回想において「女王」は、「色とりどりの斑点のある豹の皮を身に纏い、それを腰の上できらりと光るベルトで合わせた」、「たぐいまれな美しさの、背の高い、すらりとした少女の姿」で現れる。*二十六 島の住民が大砲によって撃退された最初の戦闘の後、「女王」は部下を引き従えてドン・ディエゴらを訪問し、停戦を結ぶ。彼女は次のように描かれる。「隊列の先頭に戦いの飾りを身につけた数名の美しい若者を私は目にした。彼らは盾を頭の上に輝く屋根のようにかざしていた。その上になんと、あのとき私たちが巌の上に見たあの驚異の少女を私は再び認めたのだった。すらりとした豹の肢体を左右に長い黒髪で覆って彼女はその厳しい美しさで恐ろしいスフィンクスのように盾の上に憩っていた。」*二十七 ドン・ディエゴの少尉は彼女の魔力 Zauber に魅了され我を忘れる。彼女は、事実、「魔法使い」eine Zauberin *二十八、「悪魔のような魔女」eine teuflische Hexe *二十九 と呼ばれる。少尉はついには彼女の側に寝返る。「女王」と彼女の民をキリスト教に改宗させようとするドン・ディエゴですら、彼女の「素晴らしい、驚異の肢体から目を離せない」in den Anblick ihrer wunderbaren Erscheinung ことがある。グリーンブラットが指摘する「驚異」のディスクルスはアイヒェンドルフにおいても引き継がれている。しかし、さらに彼女

が首に「打ち倒した敵の歯という真珠でできた首飾り」eine Perlenschnur von Zähnen erschlagener Feinde をしていると付け加えられるのである。*三十

自ら豹に擬せられる、「豹の毛皮」に身をつつんだ野蛮にして美しい少女。そのように「女王」は描かれるのである。彼女は、ドン・ディエゴたちを訪れた際ドン・ディエゴのもとで絨毯を盗んだ自らの部下を自らの矢で射抜いて殺すことを厭わない。暴力とエロティシズム、危険と蠱惑を「女王」は一身に体現してる。「女王」は、一九〇〇年頃に流行する植民地文学（Robert Müller, Max Dauthendey, Hans Grimm 等）においていよいよもって流行するエグゾティシズムの表象の束である。「女王」には「文明」の反対物としての「自然」が割り当てられている。「女王」には「文明」によって手なずけられていないものの総体が顕わとなっている。*三十一 フロイトは、アフリカ大陸の比喩を借りて「成人女性の性生活」は「心理学にとって暗黒大陸」dark continent für die Psychologie であると書いたことがある。この文は逆転されねばならない。「暗黒大陸」はドン・ディエゴの抑圧された願望像の方である。「異質なるもの」は男の無意識が投影されるスクリーンとして構成されているのである。*三十二

ラス・カサスの論争相手ヒネス・デ・セプルベダのスペイン人・



インディオの優劣論に触れてトドロフは、「なによりもまず、他者とは私たちの肉体そのものなのだ。そこから女性が獣に同一視された」とベンヤミン風に述べる。*三十三「異質なるもの」を「野蛮」――それがネガティヴにであれポジティヴにであれ――として表象してしまう眼差しは「異質なるもの」との出会いを自己反省し、相対化し、そして自分自身を知るきっかけとすることを阻止してしまう。「人を不安にする差異の経験」beunruhigende Erfahrung der Differenz *三十四 は、「異質なるもの」がステレオタイプの表象群の鋳型に押し込まれることによって、それが本来持ち得るかも知れない相互理解の可能性を最後まで耐え抜き通すことはない。

アイヒェンドルフはこの物語を、あたかも世界が未だ無傷であるかのように、終わらせる。だが、二つの文化の間には、また意識と無意識の間には架橋しがたい断絶が口を開いている。この物語の舞台となっている島は「不気味な火山性大地」auf unheimlichem vulkanischem Boden *三十五 であると言われているが、この物語そのものがいつ爆発するとも知れない「火山」の上に構成されていたのである。

植民地探検の初めから存在していた、「野蛮にして女性的なもの」としての「異質なるもの」という表象をア

イヒェンドルフはスペイン人の植民地主義に対するあらゆる批判にも拘わらず内面化していたと言わざるをえない。

エグゾティシズム批判とエグゾティシズム、この両者がアイヒェンドルフには混在している。多木浩二は『ヨーロッパ人の描いた世界　コロンブスからクックまで』という書物で、多くの航海記、旅行記に付された版画などの視覚メディアにおいてヨーロッパ人が「他者」を如何に描いたかに触れて次のように述べる。「多くの航海記、旅行記にあらわれる版画、ときには現地に同行した画家によって描かれた原画を見ていくと、ヨーロッパ人がいかなる固有のまなざし、認識の装置、いかなる感情をもって世界を見たか、そしていかに努力しても完全な他者の理解には達しなかったかをあまり自覚はしていなかったように思える。」*三十六「描く」ということは、それが視覚メディアによるものであれ、言語によるものであれ、多木の述べるとおり、普遍的であるというよりある文化に属している。従って知覚、認識も同じく文化的様式に規定されているのである。*三十七

アイヒェンドルフを植民地主義者として批判することが私の意図ではない。彼のスペイン人批判が中途半端なものであるにも拘わらず、アイヒェンドルフは、ジョゼフ・コンラッドが『闇の奥』の主人公マーロウの伯母に言わせている「無知蒙昧な土民大衆を、その恐るべき生活状態から救い出す」*三十八という植民地主義を正当化する言説が自己欺瞞であることを当時認識していた数少ない者の一人であることは否定できないことと私は思う。それだからこそそのアイヒェンドルフが島の住民を描くに当たってコロンブス以来の西欧の眼差しから自由になることができなかったという事実の持つ重みを私は強調したいのである。われわれが無意識のうちに内面化している文化的様式としての眼差し、それをいかに自覚し相対化できるかという問いを自らに立てること、そのことが、アイヒェンドルフのこの作品を現代に蘇らせる。「他者とは発見すべきものだ」とトドロフは言い*三十九、「平等のなかで差異を生きること」を強調する。*四十「優越性／劣等性に堕することのない差異」、

「私と対等ではあるが異なった主体としての他者の発見」[*四十一]というトドロフの認識はアドルノの次のような認識に通ずる。「平和とは異なったものどうしが互いに支配することなく共存する状態である。そこでは異なったものどうしが互いに参画し合う」。[*四十二]この「他者とのコミュニケーション」[*四十三]を成立させるためには、われわれの内なる、意識されざる文化的眼差しそのものを意識化することから始めねばならない。その契機となるのが異文化に接したときのわれわれの「驚き」であることは言をまたない。異文化理解とは、「驚き」を強引にわれわれの文化コードに押し込めないこと、むしろそれに収まりきれない居心地の悪さに耐えること、そして自己主張すること以上に、他者に耳を傾けることによって初めて端緒が開かれる何ものかである。この課題はまさにわれわれに課されている。

図版出典

八十八頁　「アメリカ」Philippe Galle　一六〇〇年頃

八十九頁　「アメリカ」Adrian Collaert　一五九五～一六〇〇年頃

九十頁　「アメリコ・ヴェスプッチの上陸」Johannes Stradanus に拠った Theodor Galle の銅版画　一六〇〇年頃

Weigel, Sigrid: Die nahe Fremde - das Territorium des 'Weiblichen'. Zum Verhaltnis von 'Wilden' und 'Frauen' im Diskurs der Aufklärung, in: Die andere Welt. Studien zum Exotismus, hrsg. von Thomas Koebner und Gerhart Pikkerodt, Frankfurt a.M. 1987 より引用。

註

＊一　Sibylle von Steinsdorff: "Das gantze noch einmal überarbeiten!" Notizen Eichendorffs zur geplanten Überarbeitung seiner Novelle "Eine Meerfahrt", in: Aurora 44(1984), S. 71 - 78. を参照。Eichendorff-Kommentar Bd I, zu den Dichtungen, von Ansgar Hillach und Klaus-Dieter Krabiel, München, 1971, S.156f. に拠れば一八三五年ないしは三六年。

＊二　Sibylle von Steinsdorff を参照。遺稿の中には改稿のためのメモも含まれていたが、第二次世界大戦末期、ナイセのアイヒェンドルフ記念館から疎開のために持ち出された一九四五年以来、所在が判らなくなった。一九八〇年頃、行方不明となっていたメモ九葉のうち四葉が自筆原稿取引市場に現れた。そのうち三葉を一九八五年、das freie Hochstift が購入し、一葉は個人の所有となった。個人の所有となったメモには「全体にもう一度手を加えること！」とアイヒェンドルフの美しい手跡で記されている。そのメモに拠れば、改稿の意図は、全体をもっと短くし、引き締め、登場人物の性格付けをさらに鮮明にすることにあったようである。これらのメモは一八三四年から三七年に書かれたものと推定されている。フォン・シュタインスドルフは、一八三四年にこの短編が構想され、三五年に完全な初稿が成立し、その後全面的改稿の計画が熱心になされ、それが三七年に突然中断されたとしている。テクスト校訂についての最新の成果は Konrad Polheim が原典批判版の註において提示している。Sämtliche Werke des Freiherrn Joseph von Eichendorff, historisch-kritische Ausgabe Bd. V/2, Erzählungen Erster Teil, Kommentar, Tübingen 2000, S.401 - 450. またこの註においてポールハイムは「航海」に関する資料（シュタインスドルフの言及した戦後発見された手稿を含む。また一八六四年版全集のテキストについては出典の指示のみ）を一一点掲げている。

＊三　平凡社大百科事典第七巻一九八五年、「植民地」（六四九頁以下）、「植民地主義」（六五四頁）の項目参照。

＊四　多木浩二『船がゆく　キャプテン・クック　支配の航跡』新書館一九九八年、八頁。ツヴェタン・トドロフ『他者の記号学　アメリカ大陸の征服』法政大学出版局。

＊五　多木浩二、前掲書八頁以下。世界の地図化については若林幹夫『地図の創造力』講談社一九九五年をも参照。

＊六　「航海」の舞台はアメリカ沿岸であるはずなのに、アイヒェンドルフの描く島は南太平洋を想起させる。（「極楽鳥」、

「パンノキ」、「火山」等。）それに加えてアイヒェンドルフの作品に頻出する「ノロジカ」Reh、「菩提樹」といった中欧を想起させるイメージが混入している。「パンノキ」については白幡洋三郎『プラントハンター　ヨーロッパの植物熱と日本』講談社（一九九四年）二九頁以下を参照。また西村三郎『リンネとその使徒たち　探検博物学の夜明け』人文書院一九八九年をも参照。『プラントハンター』に拠れば「パンノキ」はクワ科の常緑高木でポリネシアが原産であり、果実は直径十五～二〇センチの球形で、加熱するとパンのような味がするという。この木はキャプテン・クックの航海時に発見され、クックの死後、一七八九年タヒチ島からバウンティ号によって、（上）で触れたイギリス・キュー植物園に持ち帰られた。それはさらに西インド諸島の植民地の奴隷の食料とするために先ずはジャマイカ島に移植されることとなった。「極楽鳥」Paradiesvogel は学名フウチョウ（風鳥）Paradieaeidae といい、極楽鳥の名前からも判るとおりその美しさと特異な飾羽（雄）で知られる。一部の例外を除いてニューギニアとその付属の島に生息する。因みにゴクラクチョウカ（極楽鳥花）がヨーロッパに紹介されるのもキャプテン・クックの第二回目の航海（一七七二年）をきっかけとしている。第一回航海に同乗した「ジェントルマン・アマチュア」の博物学者ジョゼフ・バンクス、後に王立協会会長となるバンクスが派遣したプラントハンター、フランシス・マッソンが南アフリカで採取し、ロンドンのキュー植物園のバンクスに送ったものである。

新しい植物は温室の構造をも変える。一七世紀末まではオレンジ栽培用の、木製の「オランジェリー」が王侯貴族のもとに造られたが、一八世紀中頃以降「椰子」に代表される熱帯植物が好まれることとなる。ヤシを栽培するためにガラスを多量に使った大型の温室が各地に建造される。その延長線上に一八五一年のロンドン万国博覧会会場「水晶宮」、ガラスと鉄による建築がある。（吉見俊哉『博覧会の政治学　まなざしの近代』中公新書二〇〇一年（一九九二年）三七頁以下を参照。温室・植物園については Koppelkamm, Stefan: Künstliche Paradiese. Gewächshäuser und Wintergärten des 19. Jahrhunderts, Berlin 1988 を参照。ジョセフ・パクストンの「水晶宮」については松村昌家『水晶宮物語　ロンドン万国博覧会一八五一年』ちくま学芸文庫二〇〇〇年を参照。）

北はハワイ島、東はイースター島、西はニュージーランドを結ぶ三角からなるポリネシアには多くの火山島が存在する。この作品で重要な役割を果たす「豹」Panther は、もっとも、アフリカを中心とし、アラビア、マレー半島

その他に生息する。少なくとも中部アメリカには存在しない。欧米人による南太平洋の表象については、Rod Edmond: Representing the South Pacific. Colonial Discourse from Cook to Gauguin, Cambridge University Press 1997 を参照。

＊七　平凡社大百科事典第七巻「植民地」（六四九頁以下）、「植民地主義」（六五四頁）の項目参照。

＊八　Schmidt, Rochus: Deutschlands Kolonien, ihre Gestaltung, Entwickelung und Hilfsquellen, Berlin, ca. 1898, unveränderter Nachdruck, 1999 及び A. Seidel: Deutschlands Kolonien, Koloniales Lesebuch für Schule und Haus, Beschreibung der deutschen Schutzgebiete nebst einer Auswahl aus der kolonialen Literatur, Riprintauflage der Originalausgabe von 1913 参照。

＊九　エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』上、平凡社ライブラリー、一九九三年、一九七頁。

＊十　HKA Bd.III, S54. Maler, Anselm : Die Entdeckung Amerikas als romantisches Thema. Zu Eichendorffs >Meerfahrt< und ihren Quellen, in: Ansichten zu Eichendorff, hrsg. von Alfred Riemen, Sigmaringen 1988, S.170 - 205 は、Campe の、コロンブスの第三次航海を描いたEntdeckung Amerikas（1807）が「航海」の下敷きになっていると主張している。（一七三頁以下）

＊十一　万国博覧会については吉見俊哉前掲書及び鹿島茂『絶景、パリ万国博覧会　サン＝シモンの鉄の夢』河出書房新社一九九二年を参照。

＊十二　Exotische Welt in populären Lektüren, hrsg. von Anselm Maler, Tübingen 1990 及び Aufbruch und Abenteuer. Deutsche und englische Abenteuerliteratur von Robinson bis Winnetou, hrsg. von Kevin Carpenter und Bernd Steinbrink, Oldenburg 1984 参照。「善良なる未開人」については Karl-Heinz Kohl: Entzauberter Blick. Das Bild vom Guten Wilden und die Erfahrung der Zivilisation, Berlin 1981 を参照。

＊十三　「航海」からの引用は以下 HKA Bd.V/1, S.199 - 274 に拠る。

＊十四　歴史批判版に至るまで多くの註が Linie を「赤道」としているが、地図を看れば一目瞭然のように、これは本初子午線（グリニッジ天文台を通る子午線）のことである。ヴァレンシアを出帆した船はこの子午線を二度横切り、ジブラルタル海峡を通過して大西洋に出る。さもなければ「（「フォルトゥーナ」は）die Linie を越えて今や nun 大

西洋へと（乗り出す）」という文の nun の意味が通じないであろう。

＊十五　アラゴン国王フェルナンドとカスティリア王国女王イサベルが、紀元七七一年にイベリア半島に進入していたムーア人をついにグラナダに破ったのが一四九二年、コロンブスの第一回航海の年の一月のことであった。ドン・ディエゴの出帆は一五一〇年に設定されている。一四九九年から一五〇四年にかけてイタリア人ベスプッチ Amerigo Vespucci はベネズエラ、ブラジル沿岸を探検し、その土地は彼の名に因んでアメリカと名づけられることとなる。またディエゴとアントニオの航海の間に横たわる三十年間の間にはコルテスによるアステカ王国の滅亡（一五一九年）、マゼランによるマゼラン海峡通過（一五二〇年）、さらには後にキャプテン・クックによって「空白」が埋められることになる南太平洋の横断があった。

＊十六　Schnyder, Peter: Exotismus und Spätromantik. Eichendorffs Meerfahrt als Beitrag zum Kolonialdiskurs des 19. Jahrhunderts, in Aurora 60 (2000), S.132.

＊十七　『コロンブス航海誌』岩波文庫一九八六年、三七頁。

＊十八　スティーヴン・グリーンブラット『驚異と占有　新世界の驚き』みすず書房一九九四年、一二〇頁。

＊十九　トドロフ前掲書。

＊二十　a.a.O. S.218f.

＊二十一　a.a.O. S.220.

＊二十二　a.a.O. S.221.

＊二十三　a.a.O. S.221.

＊二十四　a.a.O. S.209.

＊二十五　ドン・ディエゴの回想ではドン・ディエゴ自身が語り手である。回想のなかの話はすべて彼のパースペクティヴから語られる。その限りでは、彼の回想が一人のスペイン人を凡例としてヨーロッパ人の典型的な表象としてのエグゾティシズムを明らかにするために導入されたとする可能性はなくはないであろう。もしもそうであるならばアイヒェンドルフはエグゾティシズム批判者としての真価を発揮したことであろう。しかしながら、「他者」をスペ

イン人の目からのみ一貫して描き、そうすることによって語り手がスペイン人の「眼差し」から批判的距離を取るというパースペクティヴは、この作品全体の中では貫徹されていない。その結果「他者」についての表象は大部分語り手であるアイヒェンドルフに帰せざるを得ない。

*二十六　a.a.O. S.256.

*二十七　a.a.O. S.259.

*二十八　a.a.O. S.260.

*二十九　a.a.O. S.257

*三十　a.a.O. S.262.

*三十一　Weigel, Sigrid: Die nahe Fremde - das Territorium des 'Weiblichen'. Zum Verhältnis von 'Wilden' und 'Frauen' im Diskurs der Aufklärung , in: Die andere Welt. Studien zum Exotismus, hrsg. von Thomas Koebner und Gerhart Pickerodt, Frankfurt a.M. 1987 を参照。

*三十二　Freud, Sigmund: Die Frage der Laienanalyse(1926), in: derselbe, Studienausgabe, Ergänzungsband, Frankfurut a. M. 1989, S.50.

*三十三　トドロフ、前掲書二一三頁。

*三十四　Japp, Uwe: Aufgeklärtes Europa und natürliche Südsee. Georg Forsters 'Reise um die Welt', in: Reise und Utopie. Zur Literatur der Spätaufklärung, Hg. v. R. Berger u.a. Berlin 1985. S.39. Zitiert nach Weigel, Sigrid, a.a.O. S. 183.

*三十五　a.a.O. S.217.

*三十六　多木浩二『ヨーロッパ人の描いた世界　コロンブスからクックまで』岩波書店二〇〇〇年（第一刷一九九一年）三頁以下。

*三十七　多木浩二、前掲書五頁。

*三十八　ジョゼフ・コンラッド『闇の奥』中野好夫訳（『コンラッド中短編小説集』一、人文書院一九八三年所収）八七頁。Heart of Darkness, Penguin Classics, London 1983, S.39.

＊三十九　トドロフ、前掲書三四三頁。
＊四十　トドロフ、前掲書三四六頁。
＊四十一　トドロフ、前掲書三四六頁、三四三頁。
＊四十二　Adorno, Th.: Gesammelte Schriften 10-2, Frankfurt a.M. 1997, S743.
＊四十三　Adorno, a.a.O. S.743.